金葉和歌集　詞花和歌集

新日本古典文学大

新日本古典文学大系

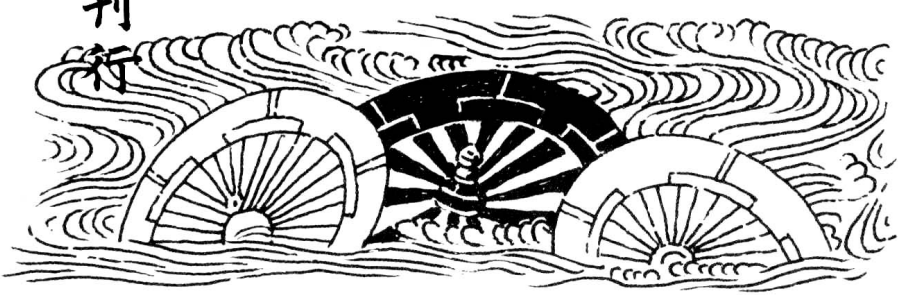
金葉和歌集

川村晃生
柏木由夫
工藤重矩
校注

江苏工业学院图书馆
藏书章

金葉和歌集

岩波書店刊行



金葉和歌集　詞花和歌集　新日本古典文学大系 9

一九八九年　九　月二〇日　第一刷発行
一九九六年　九　月一〇日　第三刷発行

校注者　川村晃生（かわむらてるお）　柏木由夫（かしわぎよしお）　工藤重矩（くどうしげのり）
発行者　安江良介
発行所　株式会社　岩波書店
〒101-02　東京都千代田区一ツ橋二-五-五
電　話　案内 〇三-三二〇-四〇〇〇

© 川村晃生・柏木由夫・工藤重矩　一九八九

R〈日本複写権センター委託出版物〉本書の無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写は、日本複写権センター（〇三-三四〇一-二三八二）の許諾を得て下さい。

Printed in Japan
ISBN4-00-240009-3

編集委員
佐竹昭広
大曾根章介
久保田淳
中野三敏

題字　今井凌雪

凡例

一　底本

『金葉和歌集』は、ノートルダム清心女子大学正宗文庫蔵伝二条為明筆本(複製本)を用い、誤写・脱落を尊経閣文庫蔵伝二条為遠筆本、国学院大学蔵伝二条為家筆本、正保四年版本によって補訂した。

『詞花和歌集』は、国立歴史民俗博物館蔵伝為忠筆本(旧高松宮家蔵)を用いた。

二　本文の翻刻は左の方針に従った。

1　漢字はすべて通行の字体を用いた。

2　仮名遣いは底本のままとし、底本が歴史的仮名遣いと異なる場合は、歴史的仮名遣いを（　）に入れて傍記した。

3　清濁は、校注者の見解に従って施した。

4　仮名には適宜漢字をあてて読解の便をはかったが、その場合、もとの仮名を振り仮名の形で残した。

5　反復記号は原則として底本のままとしたが、該当箇所に仮名・漢字をあてた場合は、反復記号を振り仮名の位置に残した。

6　底本の本文を改めた場合は、その旨を脚注に記した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

7　傍書、傍注はすべて略に従った。

8　難読漢字その他には、（　）に入れて読みがなを記した。

9　詞書中の漢文表記には訓点が付されていないが、読みやすさを考慮して、三字題以上の歌題には返り点・送り仮名を施した。

三　本文の歌番号は『新編国歌大観』に従った。

四　脚注は、大意、語注、参考事項の順に掲げたが、人名・地名の解説は、概ね巻末の人名索引・地名索引に一括して示した。

五　脚注に引用した歌集等は、主に『新編国歌大観』に拠ったが、『堀河百首』や『袋草紙』など個別のテキストに拠ったものもある。また、私家集の呼称は主に作者名に拠った。

六　付録については、それぞれに付した凡例を参照されたい。

七　『金葉和歌集』本文末尾の「補遺歌」について。

1　二度本の精撰過程において切り出されたと思しい歌を、二度本の中で所有歌の多い正保四年版二十一代集本、八代集抄本等によって集成し、本文末尾に示した。

2　（　）を付した詞書は、正保版本等において、その詞書の並びにあることを示す。

八　人名索引は工藤が、地名索引は川村と柏木がそれぞれ分担執筆した。

『金葉和歌集』の本文の選定にあたっては平沢五郎氏の御教示を、また『金葉和歌集』本文の作成、『金葉和歌集』『詞花和歌集』の他出一覧、出典解説について小林一彦・佐々木孝浩両氏の協力を得た。

目次

凡例……v

金葉和歌集

巻第一　春部……四
巻第二　夏部……二九
巻第三　秋部……四六
巻第四　冬部……七三
巻第五　賀部……八五
巻第六　別部……九四
巻第七　恋部上……一〇〇
巻第八　恋部下……一二〇
巻第九　雑部上……一四六
巻第十　雑部下……一七七

詞花和歌集

巻第一　春……二三〇
巻第二　夏……二三五
巻第三　秋……二四四
巻第四　冬……二六〇
巻第五　賀……二六六
巻第六　別……二七〇
巻第七　恋　上……二七六
巻第八　恋　下……二九〇
巻第九　雑　上……三〇三
巻第十　雑　下……三二九

付　録

三奏本『金葉和歌集』……三五三
他出一覧
金葉和歌集……三八九
金葉和歌集二度本・三奏本重出歌一覧　四〇六
詞花和歌集……四〇八
顕昭『詞花集注』一覧　四一九

出典歌合・百首歌解説……四三〇

解　説

『金葉和歌集』解説……四三九
『詞花和歌集』解説……四四七

索　引

地名索引……37
人名索引……12
初句索引……2

金葉和歌集

柏木由夫
川村晃生
校注

解　題

勅撰集は、単に秀歌の集成を目的として編まれた歌集ではなかった。たとえば天皇や上皇にとっては、それは国家統治の象徴として重い意味をも持っていたのである。それゆえに歌人としての誇りと自己主張を持つ撰者たちは、編纂途上において幾多の困難とむかい合わねばならなかったと想像される。中でも、一一二六、七年頃成立したと思われる第五勅撰集『金葉和歌集』は、二度にわたる奏覧が却下され、三度目にして嘉納されるという数奇な運命を辿った歌集である。撰者源俊頼の意図の何が、下命者白河上皇の気に召さなかったのであろうか。

たとえば二度本の巻末に、

七十になるまで司もなくて、よろづにあやしき事を思ひ嘆きてよめる　　源俊頼朝臣

七十にみちぬる潮の浜楸（ひさぎ）
　ひさしく世にもむもれぬるかな

という撰者詠がある。これは、我が身の沈淪と不遇という、いわば私情を上皇に直訴したということに他ならない。しかし三奏本ではこの歌は除棄されている。あるいはこの訴嘆も、二度本却下の理由の一つに数えられるのであろうか。

このようなことが、勅撰集という文学作品は何を目指すものなのかという疑問を我々に抱かしめる。『金葉和歌集』は、勅撰集というものを考える上で、様々な材料を提供していると言ってよいであろう。初奏本はその全容が不明だが、本書には二度本の終稿本を収めて脚注を付し、付録に三奏本本文を収めた。比べて味読していただきたい。

『古今集』から『新古今集』に至る王朝和歌の流れは、第四勅撰集『後拾遺集』のあたりで、一つの転換点を迎えたと言えよう。それは王朝和歌の抒情性を継承しつつも、一面では三代集的世界からの飛躍であり、脱皮であった。その『後拾遺集』の新風の担い手の一人であった源経信は、俊頼の父である。後拾遺集時代の歌壇の重鎮でありながら、同集の編者の任から洩れた経信の権威とその詠風の回復を、俊頼はひそかに意図していたのかもしれない。俊頼は経信の新趣の表現や方法を、積極的に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

享受し、展開させようとしている。たとえば同じ『金葉集』の中に収める次の経信詠と俊頼詠の酷似する内容と歌風は、どうであろうか。

三室山もみぢ散るらし旅人の
　菅の小笠ににしきおりかく　（冬・三六三　経信）

音羽山もみぢ散るらし逢坂の
　関の小川ににしきおりかく　（秋・二四六　俊頼）

この俊頼詠は、晴儀歌合への初参加の折の作品として、彼にとって記念すべき一首であったが、これは単なる換骨奪胎にすぎないとも言える。しかしこの方法こそが、父経信の詠風の正当性を、当代に訴えようとする俊頼の方法でもあったのではなかったか。

このような、たとえば叙景歌の詠法において、経信に代表される後拾遺集時代の新風を受け継ぎつつも、一方で『金葉集』は、当代を活写しつつ特異な一面を見せてもいる。まず雑部下の連歌が注意を引く。連歌はすでに『拾遺集』に取り入れられていたが、それは王朝和歌とは別趣な、口語や俗語による世俗社会の提示でもあった。そこには単なる貴族趣味とは異なった、民衆や土俗への関心の高まりが示されている。またそれに関って、和歌自体も口語性豊かな表現によって、新たな歌風を開きつつあった。とくに恋部や雑部の歌には、その傾向が強い。

一方当代性という点で言えば、保安五年（一一二四）の、白河院、鳥羽院、待賢門院三院の白河花見御幸の華やかな詠歌の数々（春・三〇―三四）や、天王寺の西門信仰を描く障子絵を詠じた俊頼の詠歌（雑下・六三七）などに代表される、当代の宮廷や社会そのものの息吹を伝える詠歌なども注意されてよい。

さらに『金葉集』は、このような新風や当代性の上に、『古今集』以来の優美典雅なる王朝和歌の精髄をも再評価しようとする点も認められ、まさに平安和歌の多様な広がりを、一つの集の中に凝縮していると言ってよいであろう。それはひとえに、源俊頼という異才の出現によってはじめて可能であったのかもしれないが、こうして成った『金葉集』は、雅俗こもごもの王朝和歌のダイナミックな側面を読み取るに十分な歌集である。

（川村晃生・柏木由夫）

金葉和歌集巻第一

春　部

堀河院の御時百首歌めしけるに、立春の心を　　修理大夫顕季

よみ侍(はべり)ける

1 うちなびき春はきにけり山河(やまがは)の岩間(いはま)の氷(こほり)けふやとくらむ

春宮大夫公実

2 春たちて木末(こずゑ)にきえぬ白雪(しら)はまだきに咲(さ)ける花かとぞ見る

春一巻。立春から、梅、柳、桜、早蕨、山吹、鶯、帰雁などを主要素材として構成し、三月尽に至る。中心は桜だが、藤の八首も特色と言える。

立春　五首

1　春がやってきたよ。山の中を流れる川の岩と岩の間に張っていた氷が、今日は解けるだろうか。○堀河院の御時　堀河天皇御在位の時。応徳三年(一〇八六)―嘉承二年(一一〇七)。○百首歌　堀河百首。○うちなびき　春の枕詞。草木の靡くことからか。万葉集では「うちなびく」、次点訓の影響。▽立春の喜びから解氷を想像した歌。類歌「春霞たつやおそきと山川の岩間をくぐる音聞ゆなり」(和泉式部集・百首歌、後拾遺・春上)。礼記・月令の「孟春之月、…東風解レ凍」などの中国思想に基づく古今集以来の詠法だが、特に初期百首歌に多い。

2　春になっても、梢に消えずに残っている白雪は、早くも木に咲いた花かとばかりに見るよ。○きえぬ白雪　旧年からの残雪。○まだきに「き」に木の意を懸けるか。▽雪を花に見立てて詠む類型表現。開花への願望が根底にある。残っている雪によって旧年との連続を図る。類歌「春立つと聞きつるからに春日山消えあへぬ雪の花と見ゆらむ」(後撰・春上・凡河内躬恒)。

3　夜の明けてゆく空がいつのまにか早くも霞んでいるのは、天の戸を開けて春が立つからなのだろうか。○あけゆく　「(夜が)明ける」に「(戸を)開ける」を懸ける。○天の戸　天上にあると想像された戸で、天界の入口の門。「久方の天の戸ひらき高千穂の岳(だけ)に天降(くだ)りし…」(万葉集・

3 いつしかとあけゆく空の霞めるは天の戸よりや春は立つらん　藤原顕仲朝臣

4 つらゝゐし細谷川のとけゆくは水上よりや春は立つらん　皇后宮肥後

百首の歌の中に春の心を、人にかはりてよめる　前斎宮内侍

5 春のくる夜の間の風のいかなれば今朝ふくにしも氷とくらん

早春の心をよめる　大宰大弐長実

6 いつしかと春のしるしに立つものは朝の原の霞なりけり

巻二十・大伴家持）と見え、古語のニュアンス。▽朝霞によって春の天からの到来を想像する。壮大な景の空間的広がりと古質の語による時の悠久の広がりを感じさせる歌。当代歌風の一典型。

4　氷の張っていた流れの細い谷川が解けてゆくのは、上流から春になるからなのだろうか。○細谷川　備中国（岡山県）の歌枕としての用法と普通名詞の場合とがあるが、ここでは後者。山深い川の上流。▽一と同想だが、解氷を現実の景とする。細谷川は「山里の夜半の嵐のさむければ細谷川ぞまづこほりける」（堀河百首・氷・源師頼）の如く、冬から春にかけて注目される所。

5　春が来る夜の間に風がどのように変わったので、立春の今朝吹くと氷を解かすのだろうか。○百首の歌…堀河百首・立春。○人にかはりて　堀河百首での作者は河内。○今朝ふくにしも　昨日までは風が吹いても氷が解けることはなかったのに。▽立春になる一夜のうちの風の変化を歌う。一夜のうちの季節の変化への注目は後拾遺・春上巻頭にも見える。「夜の間の風」は通常花を散らすものとされる。「朝まだき起きてぞ見つる梅の花夜の間の風のうしろめたさに」（拾遺・春・元良親王）などの応用。

早春　一首

6　はやくも春になった目印として現われるのは、朝の原の朝霞なのだったよ。○いつしかと…立つ　霞が春を待ちかねていた心をこめる。○朝の原　朝の意を懸ける。▽同じく霞を詠む三に対して、天上から地上へと、春の到来が間近なものになっている。類歌「梓弓春のしるしにいつしかとまづたなびくは霞なりけり」（堀河百首・霞・隆源）。「いつしかと朝の原にたなびけば霞ぞ春のはじめなりける」（同・河内）。

睦月の一日ころに、雪の降りはべりければつかはしける　修理大夫顕季

7 あらたまの年のはじめに降りしけば初雪とこそいふべかりけれ

返　春宮大夫公実

8 朝戸あけて春の木末の雪みれば初花ともやいふべかるらん

実行卿家の歌合に、霞の心をよめる　少将公教母

9 朝まだきかすめる空の気色にや常磐の山は春をしるらん

藤原顕輔朝臣

10 年ごとにかはらぬものは春霞たつたの山のけしきなりけり

春雪　二首

7　新年のはじめにさかんに降るので、去年のうちから降っているのに、初雪と特に言うべきですね。○降りしけ　しきりに降る。▽本来初雪は「初雪になりにけるかな神無月あさくもりかとながめつるまに」（経信集）の如く冬の始めのもの。それを、明るく戯れた。二の旧年の雪に対して、春雪の二首は春の進行を示している。

8　朝戸をあけて、春を迎えた木々の梢に積る雪を見ると、それは初雪ではなく初花とでも言うのが良いのではなかろうか。○朝戸　朝起きて開ける戸口。万葉集から見える語。○初花　「谷風に解くる氷のひまごとにうち出づる波や春の初花」（古今・春上・源当純）を踏まえ雪を花に喩えた。▽七・八は雪への見方の差によって春の到来を楽しむ機知的贈答。

霞　三首

9　朝早くから霞んでいる空の様子によって、季節の変化がないという常磐の山は、春の到来を知るのだろうか。○気色　後拾遺集よりの自然詠重視に伴い多く用いられる語。○常磐の山　山名から常緑のイメージで詠まれる。▽参考歌「花咲かぬ常磐の山の鶯は霞をみてや春をしるらん」（能宣集）。歌合では山の擬人化を批判され、負判になった。

10　いつの年も同じなのは、春霞が立ってたなびく立田山の姿なのだったよ。○たつたの山　「（春霞）立つ」を懸ける。▽立田山は紅葉の名所だが、「朝霞やまずたなびく立田山」（万葉集・巻七）とも詠まれる。万葉風の遠白き体をめざす歌と言えるか。

霞の心をよめる　　大宰大弐長実

11 梓弓はるのけしきになりにけり入佐の山に霞たなびく

百首歌中に鶯の心をよめる　　修理大夫顕季

12 鶯のなくにつけてや真金吹く吉備の山人はるをしるらむ

はじめて鶯を聞くといふことをよめる　　春宮大夫公実

13 今日よりや梅の立枝に鶯の声さとなるゝはじめなるらん

睦月の八日春の立ちけるに、鶯のなきけるを聞きてよめる　　藤原顕輔朝臣

14 今日やさは雪うちとけて鶯の都へいづる初音なるらん

11　あたりは春らしい情景になったよ。人佐の山には霞がたなびいている。○入佐の山　「射る」の意で梓弓の縁語。▽参考歌「梓弓はるの霞はへだつれど入佐の山の月ぞさやけき」（好忠集）。三句切れによって春霞のかかった情景を鮮明に描き出している。類歌「見渡せば春のけしきになりにけり霞たなびく桜井の里」（堀河百首・霞・藤原顕季）。霞三首は、山の「けしき」を詠んだ作品に限定されている。

鶯　五首

12　鶯の鳴く声によって、吉備の国の山中に住む人は春の到来を知るのだろうか。○百首歌　堀河百首。○真金吹く　「くろがねを吹くをいふ」（能因歌枕）。吉備にかかる枕詞。○山人　真金吹く人か。▽類歌「鶯の声なかりせば雪きえぬ山里いかで春を知らまし」（拾遺・春・藤原朝忠）。二の山の霞に対して山の鶯によって連続する。

13　今日からが、梅の高く伸びた枝で、鶯の声が里に馴染む初めなのだろうか。○梅の立枝　遠くからも目立つので、鶯がはじめにとまるに相応しい。○さとなるゝ　鶯は春に谷から人里に来ると考えられた。▽参考歌「鶯の初音をきのふ聞きしかな山田の里の梅の立枝に」（能因集）。三の山の鶯から里の鶯に転ずる。

14　立春の今日が、それではなるほど、やっと雪が解けて、心軽やかに鶯の都に出て鳴く初音なのだろうか。○八日　底本「い日」。○さは　雪解けと鶯の初音への推測を強調する。○うちとけて　雪解けと、鶯の心が冬の間に比してゆるみ寛ぐことを懸ける。参考歌「氷だにとまらぬ春の谷風にまだうちとけぬ鶯の声」（拾遺・春・源順）。○初音　顕輔集の詞書では「…子日にあたりたるに鶯のなくを」とあり、「初子」がこめられている。

暁に鶯を聞くといへることをよめる　源雅兼朝臣

15 鶯の木伝ふさまもゆかしきにいま一声は明けはてて鳴け

皇后宮にて人〻うたつかうまつりけるに、雨中鶯といへることをよめる　源俊頼朝臣

16 春雨は降りしむれども鶯の声はしほれぬ物にぞありける

良暹法師しのびて物へまかりけるに、右大弁経頼が家に梅のさかりに咲きたりければ、門にひねもすに立ちくらして、夕方言ひ入れはべりける　良暹法師

17 梅の花にほふあたりは避きてこそ急ぐ道をばゆくべかりけれ

▽遅い立春で迎えた鶯の初音への喜び。三の里の鶯を都へ進めた。

15　鶯が木の枝を飛び伝う様子までも見たいので、もう一声は夜がすっかり明けてから鳴けよ。○木伝ふさまも　「鳴き声だけでなく」の意。○いま一声は明けはてて　聞いているのは、まだ夜が明けきらない薄明のうち。歌題に即している。▽鶯を聴覚だけでなく、視覚でも楽しもうとした点に新しみがある。

16　春雨はしみ通るほどに降るが、鶯の声はぬれても弱らないものだよ。○皇后宮　白河院皇女令子内親王。○雨中鶯　初出例か。○降りしむれ　しみ通るほどしっとりと降る。○声は　草木や花などとの区別とも想像できるが、鶯の身体に対比して言う。○しほれぬ　春雨で湿った声が予想されるが、そうはならず透き通るような美しい声。▽「降りしむ」と「しをれぬ」の対照で鶯の美しい声をきわ立たせることが趣向となっている。

梅　五首

17　梅の花が咲き匂っている近くは、特に寄らないようにして、急いでいる道を行かなければいけないのでしたよ。○右大弁経頼　左大弁の誤り。宇多源氏。扶義の子。貞元元年(九七六)―長暦三年(一〇三九)。○避きてこそ　梅の香に惹きつけられて時を過ごしてしまうため、そうならないように。▽類歌「梅の花にほふあたりは関路かは人とめねども行きぞやられぬ」(堀河百首・梅・河内)。作者の好士らしさを示すとともに、家主への挨拶ともなっている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com